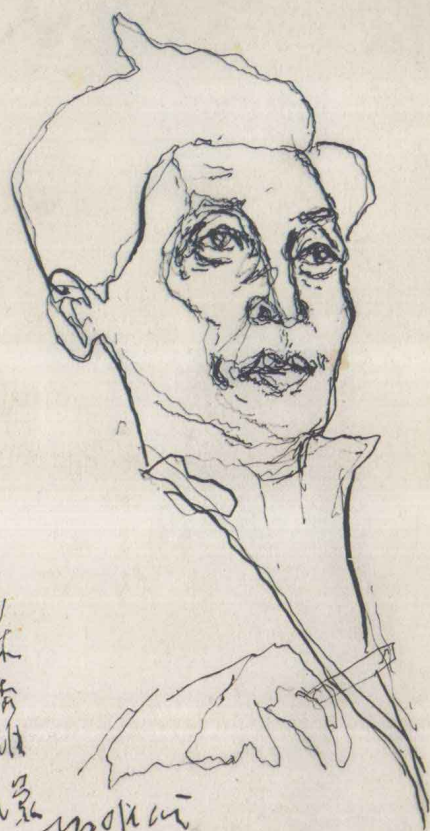


文芸読本

小林秀雄



小林秀雄
墨

秋山駿 小林秀雄の現代性 同右

永井龍男 彼岸雨日 同右

水上勉 小林さんを悼む 同右

藤枝静男 小林秀雄氏の想い出 同右

大岡昇平・大江健三郎 〈対談〉 伝えられた

もの 同右

埴谷雄高 小林秀雄と私達 「海燕」昭58・5

吉本隆明 小林秀雄について 「海」昭58・5

篠田一士 想望・小林秀雄 「すばる」昭58・5

粟津則雄 裸形の心―小林秀雄の晩年の主題

「文芸」昭58・5

寺田透 別稿：小林秀雄氏の死去の折に 同右

勝又浩 小林秀雄―自意識の方法 「群像」

昭58・5

三浦雅士 死者の視線―小林秀雄ノオト 同右

磯田光一 小林秀雄という現象 同右

粕谷一希 教祖の文学―小林秀雄と坂口安吾

「諸君」昭58・5

谷沢永一 小林秀雄の毒 同右

柄谷行人 懐疑的に語られた「夢」 「ユリ

イカ」昭58・5

高橋英郎 疾走するかなしさ 同右

石原慎太郎ほか 巨人小林秀雄の伝説 「文

芸春秋」昭58・5

川村湊 〈小林秀雄の死〉という現象 「群像」昭58・7

追記―文献目録について

雑誌・新聞・単行本一部所収論文、および全集・作品集の解説などについての網羅的な文献目録としては次のものがある。

(1) 吉田熙生編 小林秀雄参考文献目録 吉田編『小林秀雄』〈近代文学鑑賞講座17〉 角川書店 41・12

* 昭和二年～昭和四一年の文献目録。その

大部分は後出(5)清水孝純編「参考文献目録」に吸収されている。

(2) 吉田熙生編 作品・文献年表 『書誌小林秀雄』 図書新聞社 昭42・4

* 大正一三年～昭和四一年の文献目録。小

林秀雄に部分的に言及している文献をも併せて大幅に記録している。この時期に関する限り、最も網羅的な目録である。

(3) 堀内達夫編 文献目録(1)～(2) 『小林秀雄全集』月報(1)～(2) 新潮社 昭42・6～昭43・5

* (1)(2)の目録が通時的に編まれているのに対し、この目録は全集の当該巻に合わせて

主題別の編集となつていとところ的特色がある。なお、この目録は『新訂小林秀雄全集』別巻Ⅱ(新潮社 昭54・9)には収められていない。

(4) 吉田熙生編 小林秀雄研究参考文献『小林秀雄』〈日本文学研究資料叢書〉 有精堂 昭52・6

* 昭和四二年～昭和五二年の文献目録。時期的にも内容的にも(1)に接続する目録である。

(5) 清水孝純編 参考文献目録 清水編『小林秀雄』〈鑑賞日本現代文学16〉 角川書店 昭56・12

* (1)(4)を補訂し、さらに昭和五二年～昭和五六年の目録を追加している。

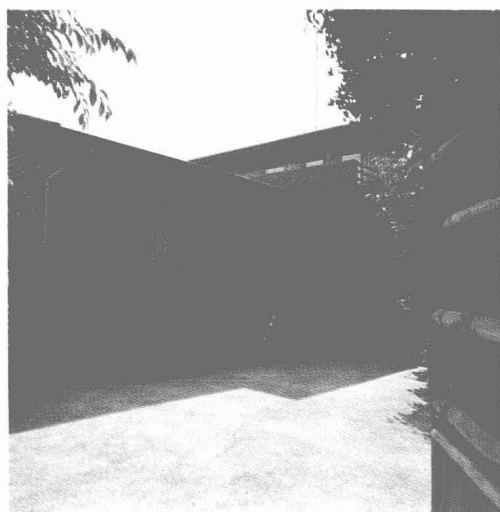
小林秀雄アルバム



葬儀に飾られた秀雄の愛した写真。昭和55年、ルオーの絵皿を背景に(吉川富三氏撮影)



境内に墓地のある北鎌倉・東慶寺



昭和51年から7年間を過した鎌倉・雪ノ下の自宅



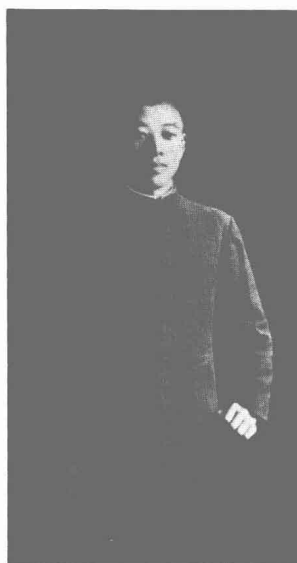
大正4年入学の府立一中時代、後列左端



生後6ヵ月、明治35年10月



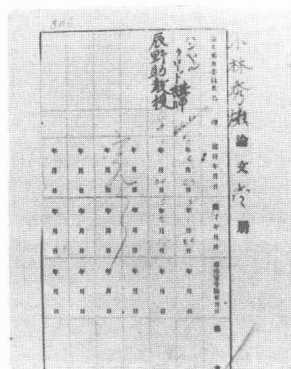
大正10年4月、旧制一高入学



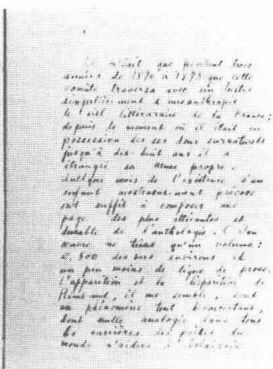
大正6年、府立一中三年の頃



満1歳のとき、明治36年4月



昭和3年3月、東大仏文卒業時の卒業論文



明治44年11月、妹・富士子の七五三



はるこ
満1歳の長女明子と、昭和13年3月



昭和14年熱海にて、川端康成撮影



国・杭州に応召中の火野葦平を訪ねる、昭和13年3月



右頁の一中全会「チビスケ会」、昭和38年11月、文化功労者顕彰祝い



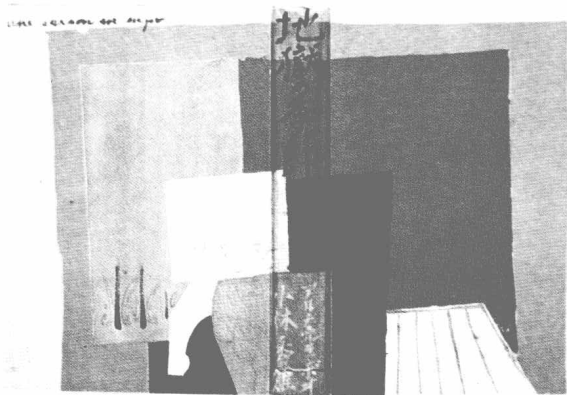
昭和10年頃の明大講師時代、久米正雄・小島政二郎・石川達三等と



昭和15年、文芸統後運動の講演旅行の途次、菊池寛と



限定本『ランボオ論』昭和12年、野田書房刊



初版本『地獄の季節』昭和5年、白水社刊



『醜酷船』の本文ページ



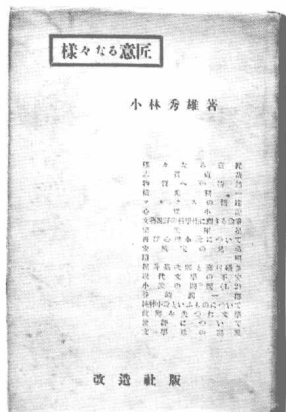
初版本『醜酷船』昭和6年、白水社刊



初版本『ドストエフスキの生活』昭和14年、創元社刊

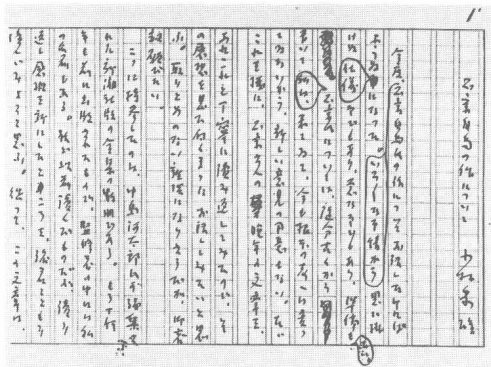
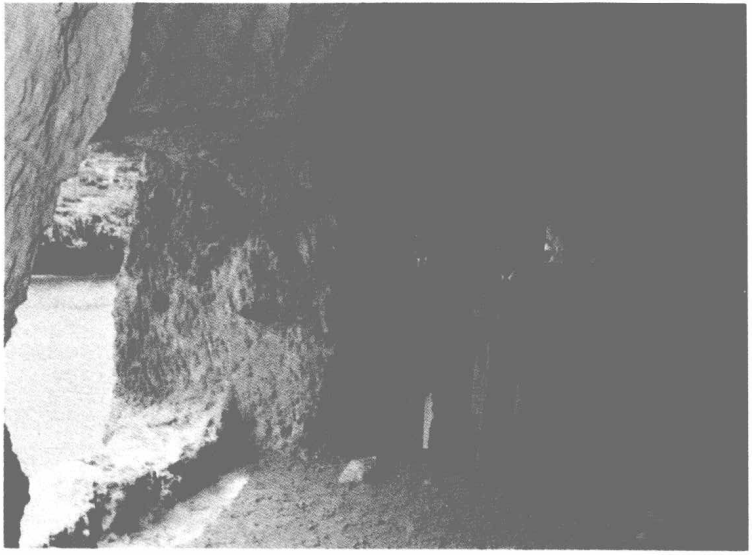


初版本『私小説論』(上製本)昭和10年、作品社刊



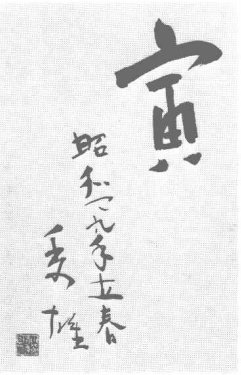
初版本『様々な意匠』昭和9年、改造社刊

昭和50年、菊池寛『恩讐の彼方に』の舞台「青の洞門」を
 今日出海と訪ねる



絶筆「正宗白鳥の作について」の原稿冒頭部分

寅年生まれの秀雄の色紙(郡司勝義氏提供)



秀雄の愛した大分県の由布院にて。由布岳を背景に秀雄夫妻と那須良輔夫妻、中央は郡司勝義





東京国立博物館にて、昭和33年12月



湯川秀樹と対談、昭和23年7月(新潮社提供)



昭和40年1月、伊勢松阪の本居宣長の墓に詣でる

昭和33年12月、自宅の書斎でくつろぐ



熊野大社本宮で神官姿の秀雄、昭和39年6月



昭和38年10月、出羽・羽黒山の祓川橋上にて夫人と

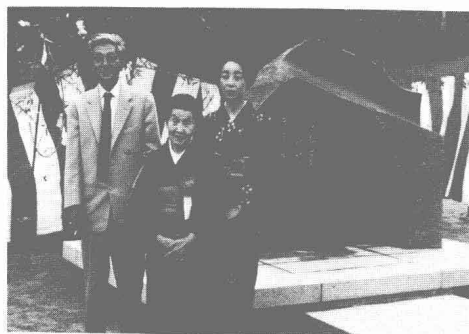




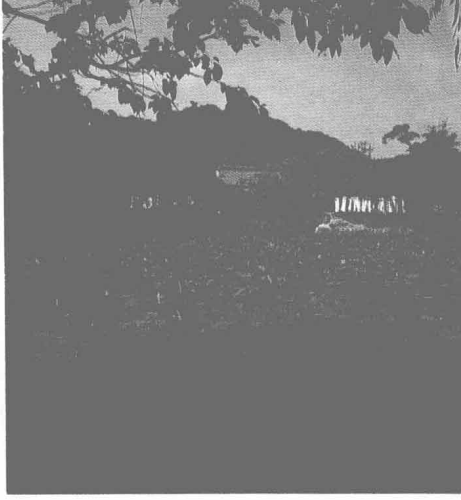
昭和51年1月、鎌倉・材木座海岸にて(新潮社提供)



昭和40年6月、中原中也の詩碑除幕式に参列。中也の母フクと
昭和58年3月2日、鎌倉・東慶寺での密葬の日。位牌を抱く夫人
フランソワの哲学者ガブリエル・マルセルと、昭和41年5月自宅の庭にて
(読売新聞提供)



中原中也との思い出の地、鎌倉・八幡宮の池



同じく中也との思い出の地、鎌倉・妙本寺（いづれも「中原中也の思ひ出」より）。秀雄はよくここに散歩した



昭和58年3月2日、鎌倉・東慶寺での密葬

秀雄が愛した自宅庭のしだれ桜

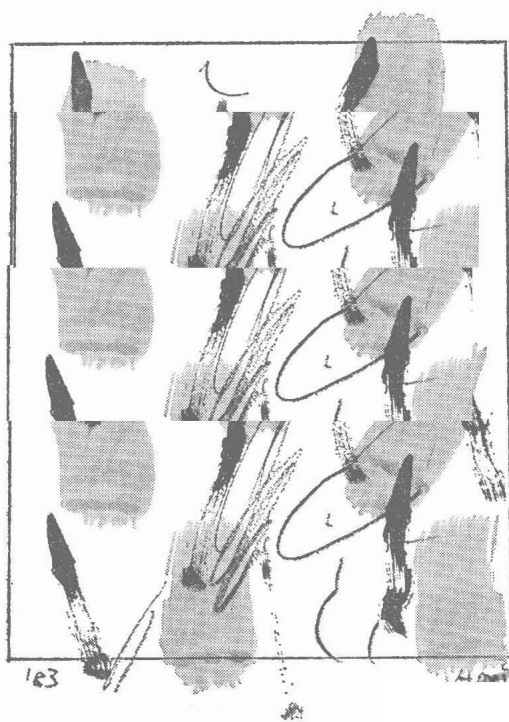


東慶寺境内の小林家の墓。愛読者が自筆の鎮魂歌集を捧げていた



初版本はいずれも堀内達夫氏提供
由布院、青の洞門以外のカラー写真は立花義臣氏撮影

文芸読本
小林秀雄



河出書房新社

人生の教師



大岡昇平

小林秀雄の名は、現代日本文学の中で、異常な重さを持っているが、その異常さは必ずしも理解されているとは言えない。小林は文芸評論家、批評家に分類されるのが普通である。しかし毎月生産される小説の評価を行う月評家の役目は、戦争中からやめてしまっている。ドストエフスキイの作品研究のほかは、文学を論ずることすら稀になっている。「モオツアルト」「私の人生観」「ゴッホの手紙」「近代絵画」「感想」「考へるヒント」「本居宣長」など、彼の戦後の仕事を列記すれば、それが主として音楽、絵画、哲学に関するものであることがわかる。ただその考察は、深いところで文学につながっていて、文学者の創作態度および読者の趣味に強い影響を与えているから、文芸評論家と呼ばれるにすぎないのである。

そこには考え抜かれた堅固な思想がある。文体に一種の優しさ、柔軟さがある。これは特に「無常といふ事」あたりから顕著になった特徴である。この優雅の源に関して、よく生得の詩人といわれることがある。なるほど中将姫の変貌を書く「当麻」は散文詩と呼ん

でもよく、「中原中也の思ひ出」の中の海棠の描写、或いは一般に自然を描写する時、小林の筆が詩趣を帯びるのは事実である。初期の批評活動は小説に対する不信感を原動力としていた。その興味は、はじめからボードレー、ランボオなど詩人に集中されていた。これらの傾向は詩人的気質を指示しているかも知れない。しかし私は詩を書かない人間を詩人と呼ぶのには、反対である。「詩的なもの」は、文学一般、あるいは音楽、絵画にも遍在すると見做されるもので、この数世紀来形成された抒情詩から抽出された特質にすぎない。それを、逆に芸術一般に敷衍したものにすぎないからである。

人間はその在るものではなく、その行ったことによって、裁かれねばならぬ。素質よりは、それがどう仕事に現われたかが問題である。ランボオの生涯を語っても、モオツアルトの作品を語っても、小林の注意が、素質と環境との戦い、天才が現実という「物」と交渉して、作品を創り出す、その内部の運動に向けられているのを知

ることが出来るだろう。ランボオとヴェルレーヌ、ゴッホとゴーガンの天才の衝突を見る眼は、劇的ということも出来る。これらの素質はそれぞれ小林の作品を生むのに参加している。しかしそれを列挙するだけでは、小林秀雄という人間の業績を蔽うには足りないと思われる。

小林秀雄の経歴はすでによく知られている。読者は「年譜」を読んで、その生涯の諸事件と作品の制作年代を確認すれば十分であろう。明治三十五年、東京の生まれ、江戸っ子といわれることがあるが、父方に播州人の血があることがわかる。江戸っ子などというのは、江戸末期の庶民的頽廢の自慰的な表現にすぎず、映画や浪花節によって美化された幻想である。生産的なものはない。元来、江戸っ子でなにかをなしとげた人はいないのである。むしろ寶石作りの技術者であった父豊造から受けた、美しいもの最上のものに対する愛、あるいは技術者の精神を見る方が気が利いている。しかし私はこういう神秘的な血を強調する気はない。くだいようだが、小林の仕事自身が、そういう単純な系譜作りを拒否するものを持っているからである。

昭和三年東大仏文科卒業、それまでに無名時代の富永太郎、中原中也など詩人と交友があった。ポードレル、ランボオ、ヴァレリイ、ジイドなど、フランス象徴派系の詩人・小説家にしたがって、文学的自我の形成が行われた。その孤独な内面生活については「中原中也の思ひ出」、三つの「ランボオ」論の中におよその輪郭を窺うことができる。

昭和四年九月、「様々なる意匠」が「改造」懸賞論文第二席に当

選したことによってデビュー、翌年、文芸時評「アシルと亀の子」を「文藝春秋」に連載して、批評家としての地位を確立した。以来「文學界」の編集者として、また昭和十年、「私小説論」、十一年、トルストイの家出をめぐる「正宗白鳥との「思想と実生活」論争、これらと平行して執筆された「ドストエフスキイの生活」などによって、文壇の指導的役割を果たしたことは、文学史の事実に戻している。

これまでの多くの「小林秀雄集」は、三十五年を越える小林の活動を網羅的に並べることが普通であるが、私はこれら初期の文壇的活動からは、「ランボオ」「志賀直哉」を採るにとどめ、昭和十七年の「当麻」「無常といふ事」以後、「モオツアルト」から最近の「考へるヒント」に到る文章を選ぶことにした。

その理由は追いついて明らかなるはずだが、簡単にいえば、小林は昭和十六年ごろから、意識して文壇から遠ざかっていた。「私の人生観」や近著「考へるヒント」などの題名が示すとおり、むしろ人生の教師・現代のソクラテスの位置を取っているのである。その引退の結果と、今日の文学界の例外的な位置をよりよく示すのは、これらの作品であるという判断に基づいているのである。そしてこの地位が決して楽に保たれたものでもないことを、見て行きたいと思う。

小林が戦争中、菊池寛らの銃後運動に加わって、かなり活潑な活動をしたことは広く知られている。そして太平洋戦争がはじまる少し前から、それらの運動、あるいは文学報国会の活動に積極的な参加を拒み、自分の世界に閉じこもってしまったこともまた知られて

いる。戦争下の便乗的文士や情報部関係の軍人に愛想をつかしたせいもあるが、戦争と政治から離れ、孤独の中に生きることを自己に要請したのである。

「当麻」「無常といふ事」「西行」「実朝」「徒然草」など、日本の古典に関する文章はこういう孤独から生まれた。それは戦時下の古典再認識の風潮に乗って書かれたものであるが（小林の活動には、外的状況への柔軟な適応性・即興性がある）、その底に明確に意識した孤独が窺われる。

そのころ、ゼークトというドイツの軍人のことを書いた論文があるが、そこで小林が指摘しているのは、軍人の専門性というべきものである。文学者もまた文学の専門家でなければならぬ、そこからはみ出してはならぬという、至極当然のことでありながら、戦中戦後の政治的時代に、人がとかく忘れがちだった判断がある。

「当麻」「無常といふ事」の比類のない美しさはこういう目醒めた孤独から生まれている。たまたま観た能に関する感想という形を取っているが、「当麻」の老婆が死んだ仔猫を下げている、というような幻想には、なにか不気味さがある。孤独に立て籠った結果、個人的な存在の根源的なものが現われてきたのである。

「実朝」はこのすぐれた若い歌人が、どうして政治の陰謀から離れ、自分の歌心を守ったかを、歴史的文献を踏まえて実証したものである。いい歌を作るには、ただ才能があるだけでは足りない。自分を守るのだが、どれだけ大事であるか、という点に小林の注意が向けられている。そういう対象の完全な肖像を描き出すことに、注意と努力が集中されているのである。

ランボオ、実朝、モオツァルトと小林が扱った主題を並べて、彼には若く死んだ天才に対して偏愛があると指摘される。ここに彼の「父性」的心性と行動形態を見るのも自由である。しかし、小林はこれら小児的存在について、その天才の自発性とともな、必ずその無垢を守る忍耐を曳き出していることを見落してはならない。

このように繰り返し描かれる努力と忍耐の動機は、これら天才たちの創造の秘密について、真実を語っているだけではなく、小林秀雄という存在の動機を示していると私には思われる。

忍耐は、ランボオの場合を除き、告白されなかった。同じように小林秀雄も告白しない。彼の若いころからの小説嫌悪は、一つには絵空事を作って、読者を誘惑するという行動に対する嫌悪であるが、告白によって、自己を誇示する心性に対する嫌悪でもある。小林は告白することを自分に禁じているので、その文章のうちに、作者のいわば後ろ姿を捉えるほかはないのである。

小林は、人生の教師として、人間の生き方、考え方を教えてくれるだけではない。また隅々まで神経が行き届いた文体によって、われわれをほつほつさせるだけではない。一つの男らしい不変の視点に貫かれた作品を、引き続いて生む努力、忍耐の主体として、われわれの前にいるのである。

「ある人の書いたものより、その後に残っているものの方がずっと多い」というのも小林がよく繰り返す言葉である。小林は若くして男女のことについて、深刻な経験をしている。それは告白に適さないだけではなく、告白すれば嘘になる、という性質のものであった。人間の醜さについて、一番よく知っているのはこの作者である。彼が見たのは、人間の表向きの醜さを描いた多くの現実暴露びやうぶの

小説を、嘘と感じさせるような醜さであった。

これら作者の深い感情に根ざしたものは、必ずしも言葉となって現われるとは限らないが、スタイルにはふくまれていいる。そしてこの特異な批評家の比類のない説得力を生んでいるのである。必ずしも小林が熟練した評論の制作者であるためではない。

「モーツァルト」は、書かれたのは戦後だが、昭和十八年ごろ構想された。つまり「実朝」と同じころである。実朝の「箱根路をわれ越えくれば」に、悲しさを見出したと同じく、「モーツァルト」は短調五重奏曲に *tristesse allante*（動きまわる悲哀）を見出したことから始まる。これはスタンダールが一八一四年に書いた「モーツァルトに関する手紙」、アンリ・ゲオン「モーツァルトとの散歩」（一九三二年）とともに、モーツァルトの音楽の本質を憂愁、つまり短調に見る意見の系列に属する。そしてこれら西欧の解釈の間に伍して引けを取らない堅固な構成を持っている。特にウイゼワの研究も未完で、アインシュタインの本もやっと出たばかりという時期に書かれたモーツァルト論として、文献的な価値も持っているのである。

終戦間もなく、各種のレコードも今日のように出廻っていなかった。文献を借り集め、譜を写したりしながら書かれたのである。この「肉体の占める部分は能うる限り少なかった天才」（スタンダール）についての、純粋な一つの旋律に貫かれた讃歌である。

「実朝」にも作者の孤独の影は差しているが、そこには伝統の上にあるという安定感があった。「モーツァルト」はコスモポリタンであったが、とにかくオーストリア人であり、カトリック信者であっ

た。しかも西欧音楽という、われわれの存在との関係が、すこぶる疑わしいものを素材としている。私は小林がある外国人に向って、「あれは自分の渇き *soif*」を現わしたものだ」というのを聞いたことがある。こういう風に自分の仕事を明白に意識しているのも、小林の精神の特徴であるが、この理論家の不断の探究の底には、一つの人生的な渇きがあって、推進力となっていると考えられるのである。

「モーツァルト」は短い断章から成り、各章は一見関連がなく、論旨は飛躍しているように見えながら、内面的論理によって説得的になるという形態を取っている。これはおそらくヴァレリーの「ドガ、ダンス、デッサン」から学んだ手法であるが、章を繋げているのは、依然として小林という人間の精神の息吹きである。言葉の論理的結合よりも、対象の記述、あるいは命題の、調和と反響によって一つの説得と感銘を作り出すという、「当麻」あたりから、意識的に取り出した方法が、モーツァルトという宇宙的な存在を素材として、最も豊かな音色とリズムを出す幸運に恵まれたといえよう。

「モーツァルト」を小林の批評活動の頂点におく意見があるのは当然である。

終戦直後二、三年は、日本の文学界が異常な緊張の裡にあった時期である。谷崎潤一郎、永井荷風など大家の復活、野間宏、椎名麟三などいわゆる戦後派の進出があり、坂口安吾、石川淳など無頼派の流行があった。その中で小林は「当麻」以来の古典的な態度を守っていた。新しいジャーナリズムと絶縁すると宣言し、創元社から定価百円の高級季刊誌「創元」を出した。「モーツァルト」はその第

一輯（二十一年十二月刊）に載つたものであった。第二輯は二十三年十一月まで出なかつたが、「罪と罰」はそこへ載つた。

小林は昭和十年以来、「文学界」に「ドストエフスキイの生活」を連載する一方、「白痴」「罪と罰」「悪霊」などについて、個別的な作品研究を発表して来た。これは小林の仕事の中で、一番長い時期にわたるものである。「ドストエフスキイの生活」の方は、十四年に出版されたが、作品研究の方は、今日でもついにまとめることが出来ずにいる。これは最近のベルグソン研究（感想、昭和三十三年三月十八年）とともに、彼の二つの未完の仕事である。なんでも突きつめて考え、またそれをやり通す小林としては珍しいことである。それだけ対象が複雑で難しかったのである。

「罪と罰」については、昭和九年五月「文芸」に同じ題で一度書いている。十四年ぶりに同じ主題に取りかかつたのである。

ネヴァ河の日没を見るラスコオリニコフの孤独から書き始められている。これは昭和九年の論文でも主調となつていたので、小林の精神生活、その渇きと深い関連があることを示している。

読者はここに「罪と罰」の、ほとんど完璧な再現を読むことが出来る。「罪と罰」はドストエフスキイの作品中、最も通俗的で、お望みなら推理小説的であるといつてもよい作品だが、しかしドストエフスキイは殺人の真の動機——一人の病人だ知識人が、その病人だ意識のために、殺人を犯し、売笑婦に告白するに到る経過を、推理小説と恋愛小説の読者に、すぐわかるように書いてはいない。これは解説を要する作品なのだが、それがこれほど完璧に遂行された例を私は知らない。

小林は対象自身をして語らせるといふ新しい批評方法によつてゐる。小説「罪と罰」について評論し批評してゐるのではない。物語をドストエフスキイの真意と思われるものに從つて書き直してゐるのである。その経過で自然に問題点が浮かび上る。ネヴァ河を見るラスコオリニコフに、若い日の小林の心性との類似があることは疑いないが、問題はそれに尽きたわけではない。

ドストエフスキイについては、昭和十年代にシェストフの解釈が流行した。「地下生活者の手記」や「悪霊」との関連で、副人物スヴィドリガイロフに重点をおく意見である。小林の論文では、パスカルの「考える葦」を援用しながら、考える人間ラスコオリニコフの不幸の地獄絵に重点がおかれてゐる。彼が牢獄にあつて「自由になつてしまつた」こと、「自負心を持ち堪えられなかつた」といふ一点だけにしか、自分の犯罪を認めなかつたことが確認される。

「情熱が人を噛むように、理性もまた人を傷つける。ラスコオリニコフを駆り立てた『デモン』は、否定的な破壊的な意志ではなかつた。充たされることのない真理への飢渴であつた。彼の絶望は、そこから来るからこそ、癒し難いのである。」

ふたたび渇きである。小林は十七歳のドストエフスキイが兄のミハイルに「発狂するつもりです」と書いたことを指摘する。意識的な発狂はランボオの錯乱とともに、若い小林にとつて、唯一の合理的な生き方と映つたらしかつた。その志向は、三十年たつてはじめて、しかるべき位置におかれたといえる。

これはドストエフスキイの作品の評釈というよりは、その拡大である。同時に小林の自己確認でもあつた。シベリヤの流刑地で、丸太の上に腰かけて黙想するラスコオリニコフについて、「一切の人

間的なもの孤立と不安を語る異様な（これこそ真に異様である、と小林は注をつける）背光を背負っている」と書く時、小林は彼自身の背光を示したと見做すべきである。

「（背光は）見える人には見えるであろう。そして、これを見てしまった人には、もはや『罪と罰』という表題から逃れることは出来ないであろう。作者は、この表題については、一と言も語りはしなかった。しかし、聞えるものには聞えるであろう。『すべて信仰によらぬことは罪なり』（ロマ書）と。」

これは聖書をよく読んだ者の引用であるが、その後、信仰の問題は、ドストエフスキイについても、彼自身についても、追及されなかった。「白痴」や「カラマゾフの兄弟」の研究が、未完成に終わったのも、神の存在の問題が、彼がラススコオロニコフの飢渴を追及したと同じ規模で追及されないからである。これは日本でキリスト教の神を考える者が必ず陥る袋小路である。小林はただ立ち止まるという自由を手に入れていた。おそらく「本居宣長」で最も日本的に解決されるであろう。

昭和二十三年秋、小林は「新大阪新聞」の招きで、大阪で講演した。「私の人生観」はその趣旨を敷衍したものである。小林はもともと卓れた座談家であり、講演者であり、しばしば講演の速記を加筆して、論文とする。本集の巻尾の「常識について」もその一例である。従って実際に話されなかったことが、談話体によって表現されるという結果を生むのであるが、それなりに新しい説得的なスタイルとなって、小林の評論にヴァリエティを与えている。

「私の人生観」というのは新聞社が与えた題であったが、それはち

ょうど四十六歳という最も円熟した時期にあって、人生全般について、総合的見解を展開する機会となった。これを本集の巻頭においたのは、教育者としての小林の思想、現在の「考へるヒント」に繋がる態度が端的に現れているからである。

小林はまず「人生観」という外来語が、日本において独特な定着の仕方をした点に眼をつける。現代のどんな片隅の生活者も、なんらかの人生観を持っている。それはしばしば一つの信念に固定する傾向がある。これは、彼等が浮動的な階層であるという偏見を捨てさえすれば、容易に観察されることである。その信念が「人生観」という言葉に定着されるのは、仏教の「観」という思想、というよりもむしろ行為としての思考形態が、伝統の中にあつたからである。それは観ずる者の体験と密着しているので、主体を離れて、思考の内容を云々するのは意味がない。

「西行の歌には諸行無常の思想がある、一切空の思想がある。そういう風に言うなら、そんなものは、当時の歌に、どこにでも見つかるだろう。一切は空だと承知した歌人は、当時たくさんいただろうが、空を観ずる力量にはピンからキリまであって、その力量のほどは、歌という形にはびんぎり現われるからごまかしが利かぬ。空の問題にどれほど深入りしているかを自他に証するためには、自分の空を創り出してみなければならぬ。こうなると、問題は、尋常の思想の問題とは自ら異なったものになるはずである。」

思想というものは、概念の系統づけではなく、その人の生活体験と密着したものである。これは小林が若年期にみずから経験を通じて知ったことである。ランボオ、志賀直哉、モオツァルト、ラスコオリニコフも別には見なかった。ただ、それを「力量」というとこ